

『教育図書ニュース』一九五一年四月

(教育図書ニュース)

長坂 端午著

「社会科の指導」

矢 口 新

この著作は長坂さんの人柄のにじみ出た本である。あせらず、さわがず、じっくりと行くんで行く人として長坂さんは信頼出来る人であるが、この著作もまさにそういったものである。最近社会科に対する風当りはいやに強くなっているが、むやみに興奮しないで長坂さん流に言われると、また落ち着くことが出来るのではないかといったものである。本書は、序にも云われている通り。前半の第二章までが主として理論的な問題を取扱い、第四章、第五章が指導の実際的な部分を取扱っている。即ち第一章には社会科の生れた理由がアメリカについてまず語られているが、それは社会的動向の解明から教育問題をみようという考え方に立っている。日本の事情については詳しくは逃べられていないが、考え方ははっきりしている。

第二章では、社会科の性格を問題にしてい

るが、まずそれは教科の中でも中核的な性格をもつものであること、併し、だからといって方法的に連関するというのではない、あくまで独自のものとして進めるべきことが述べられている。ここには私には議論の存する所であるが、長坂さんらしい述べ方である。道徳教育との関係は極めてはっきりしていてわかりやすく書いてある。次の地域性の問題も、往々にして誤解されている所をはっきり説いている。併しこの点はもう一步つき込んでもらいたかった。地域性と広い視野とは実際指導の場合どういう位置づけがなされるかということである。

第三章の目標と内容は、文部省の指導者としての位置に居られた氏にふさわしいもの、第四章と第五章は極めて实际的に、平易に懇切丁寧に述べられている。一般の先生方にはこの部分が一番役立つであろう。中でも単元論はよく書かれている。それから最後の「地理的、歴史的学習」は世上の論議の問題点を明らかにしている点が面白い。要するにこれは社会科についていろいろな立場で論じている人々に酔ぎめの水といった役目を果たすもので、明日からはここから出発するとよいであろう。(A5上製二三〇頁二五〇円 朝倉書店刊)

(国立教育研究所員)